

IIAS「ゲーテの会」ブックレット  
(VOL. 01094)

「新しい文明」の萌芽を探る  
—日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる—

(思想・文学分野)

「自心の源底」を尋ねて  
— 空海 of 生命論への一視点 —

公益財団法人国際高等研究所  
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2024年5月23日開催の第94回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

## 「新しい文明」の萌芽を探る

— 日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる —

# 「自心の源底」を尋ねて — 空海の生命論への一視点 —

密教の代表的な経典『大日経』に、密教の覚りは「如実知自心」（如実に自心を知る）にあると説かれている。空海はその主著『秘密曼荼羅十住心論』において、第十住心「秘密莊嚴住心」の冒頭に、密教では自己の心の源底の世界を如実に知ることが開かれるのだとし、その世界とは胎藏・金剛界の両部の曼荼羅であり、かつその諸仏諸尊の各々が有する四種曼荼羅が交響する世界であると明かしている。ゆえに空海は「いのち」の根底に、そうした二重の曼荼羅世界があると示していることになろう。

では、この両部曼荼羅および四種曼荼羅の具体的な内容は、どのようなものであろうか。このことを、空海の『即身成仏義』等にも照らして解説し、かつ『十住心論』に置かれた「帰敬頌」に表われた思想をも確認して、空海の間人観・世界観の根本を理解し、それは「いのち」とどのように関わるのか考察してみたい。

### 竹村 牧男 (Makio TAKEMURA)

東洋大学名誉教授

1948年、東京生まれ。東京大学文学部卒。同大学院印度哲学博士課程中退。文化庁宗務課専門職員、筑波大学教授（哲学・思想学系）等を経て、2002年、東洋大学文学部教授。2009年9月から2020年3月まで東洋大学学長。現在、東洋大学名誉教授。東方学院講師。専門は、仏教学、宗教哲学。唯識思想研究で博士（文学）。主な著書に、『空海の哲学』（講談社現代新書）、『唯識・華嚴・空海・西田』（青土社）、『新・空海論』（青土社）、その他、多数。



## 目次

はじめに ー空海と生命ー

I 空海思想の核心 ー『十住心論』『秘密莊嚴住心』の冒頭ー

- (1) 『十住心論』とは
- (2) 『秘蔵宝鑰』にみる十住心
- (3) 秘密莊嚴住心を知る

II 曼荼羅とは何か

III 『即身成仏義』の曼荼羅思想

- (1) 「即身成仏頌」に見る「六大無礙」
- (2) 「六大無礙」から「事事無礙法界」、「人人無礙法界」へ

IV 『吽字義釈』『秘蔵宝鑰』に見る曼荼羅構造

- (1) 『吽字義釈』の「麼」字の解説
- (2) 『秘蔵宝鑰』の「秘密莊嚴心」

V 四種曼荼羅とは何か

VI 四種曼荼羅の交響

VII まとめ ー空海の曼荼羅思想といのちー

質疑応答

2024年5月23日開催

第94回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：「自心の源底」を尋ねて - 空海生命論への一視点 -

講演者：竹村 牧男（東洋大学名誉教授）

（文中敬称略）

はじめに - 空海と生命 -

国際高等研究所の今年度の事業推進のテーマは生命論とされており、その活動の端緒として、空海についての話をする事になった。そこで、本日の講演は弘法大師空海思想の解明をめざし、タイトルに『自心の源底』を尋ねて」と題している。なぜ「自心の源底」という言葉を用いているかは後ほど分かると思うが、この話を「空海生命論への一視点」として展開させていただく。

空海と生命というと、確かに結びつくような気がすると思う。もう数十年前、梅原猛氏、宮坂宥勝氏の共著で『仏教の思想』叢書シリーズ9番目の空海を論ずる書物に、「生命の海」という題がついていた（角川書店、1968年）が、おそらく空海思想、密教というものは、そういう生命観にあふれる思想であるとの印象があるのであろう。実際、そういうところは多分にあり、梅原氏もその著書の中で「仏教というと『空』ということと言われるが、もっと肯定的であり、ポジティブである」と盛んに訴えていたように思う。

それにしても、では空海思想というものは実際にどういうものなのか、どういう意味で空海と生命が結びついているのか、それを突き止めていかなければならない。しかし、その前に、そもそも空海は何を説いているのか、空海思想の核心はどこにあるのかを解明しなければならない。そのことについて、私なりに思うところをこれから話したいと思う。

本日の内容は、空海主著である『十住心論』、それから『即身成仏義』を中心にしながら、空海思想の核心と私が思うところを中心とする。



空海 (774-835) Public domain, via Wikimedia Commons

## 1 空海思想の核心 - 『十住心論』「秘密莊嚴住心」の冒頭 -

空海主著『秘密曼荼羅十住心論』である。一般には『十住心論』と省略して呼ばれているが、その中で密教の世界を明かすのが「秘密莊嚴住心 第十」という名で語られる章であり、その冒頭に「自心の源底」という言葉が出てくる。これは自己の心の一番奥の底の底に何があるかを追究したもので、それが空海によって明かされている。

それについて説明するために、まずは『十住心論』がそもそもどういうものであるかとい

うことを簡単に紹介し、その後、「秘密莊嚴住心」の冒頭に説かれている「自心の源底」としての独特の曼荼羅世界について、皆さんとともに空海の文章を読んでいきたいと思う。

### (1) 『十住心論』とは

『十住心論』の背景には、『大日経』の「仏言く、菩提心を因と為し、悲を根本と為し、方便を究竟と為す」という重要な文句がある。これが密教の全体像であり、同時に中心になる。

そして「秘密主よ、云何なるか菩提」と続くが、「菩提」とは悟りであり、特に密教の悟りを問うている。それは何かというと、「謂く、実の如く自心を知るなり」と示されている。漢文では「如実知自心」である。

続く「秘密主よ、是の阿耨多羅三藐三菩提（あのかたらさんみやくさんぼだい）は」の「阿耨多羅三藐三菩提」とは、この上ない正しい悟りという意味である。「阿耨多羅」はこれ以上はないということ、「三藐」は正しい、「三菩提」は完全な悟りという意味で、よく「無上正等覚（むじょうしょうとうがく）」と翻訳されたりする。この密教の究極の悟りは「乃至、彼の法として少分も得べき有ること無し」とされるが、つまりその世界では、対象的に捉えられるものは何一つないということである。

いずれにしても、悟りとは如実に自己の心を知ることだということが言われている。これを受け、空海は『十住心論』に次のように示している。

経に云く、

云何なるか菩提。謂く、実の如く自心を知るなり、と。

此れ是の一句に、無量の義を含ぜり。豎には十重の浅深を顕し、横には塵数の広多を示す。

（『十住心論』、『定本 弘法大師全集』〔以下、『定本』〕 第二巻、三〇七頁）

『十住心論』で空海は、「云何なるか菩提。謂く、実の如く自心を知るなり」と、『大日経』に書いてあると言っている。それに対して「此れ是の一句に、無量の義を含ぜり」、すなわち、自分の心を知ると言っても、そこには無量のあり方があるとして、「豎には十重の浅深を顕し、横には塵数の広多を示す」と言っている。縦には自己の心の浅深を、概略、十段階に分けて見ることができる。横には、他者の心と自己の心を横断して見るというところかと思うが、そうすると無量のものがあるということであろう。その内容は後ほど見るとして、要するに、自分の心の浅深は、十段階とは限られないと思うが、あえて分けるとしたら十段階に分けて見ることができると言っているわけである。

### (2) 『秘蔵宝鑰』にみる十住心

その十段階の心については、第一から第十まで名称が付されているが、それは『十住心論』も『秘蔵宝鑰（ひぞうほうやく）』も同じである。『秘蔵宝鑰』は『十住心論』をコンパクト

にまとめたものであり、ここでは『秘蔵宝鑰』からその十住心について簡単に紹介しよう。

第一異生羝羊心（いしょうていようしん）

凡夫狂酔して吾が非を悟らず、但し婬食を念うこと彼の羝羊の如し。

→ 「異生」が凡夫、「羝羊」が雄羊で、凡夫の雄羊のような心ということである。

第二愚童持齋心（ぐどうじさいしん）

外の因縁に由りて忽ちに節食を思う、施心萌動して穀の縁に遇うが如し。

→ 「愚童」=愚かな少年が齋を保つ。そうすると、本能のままに生きていた自分自身を反省し、人への親切心（施心）も芽生えてくるという。

第三嬰童無畏心（ようどうむいしん）

外道天に生じて暫く蘇息を得、彼の嬰兒と犢子との母に随うが如し。

→ これは赤ん坊の恐れなき心のような意味である。外道が善業により天に生じて満足しているけれども、それだけではまだいつか輪廻の世界に落ちてくるかもしれない。本当に自己を明らかにすることがなければ、究極の安心（あんじん）には達しないということから、仏教の世界に入って行くわけである。

第四唯蘊無我心（ゆいいうんむがしん）

唯だ法有を解して我人、皆な遮す、羊車の三蔵、悉く此の句に摂す。

→ これは声聞乗（しょうもんじょう）である。常住の我はないが、世界はあるという。

第五拔業因種心（ばつごういんじゅしん）

身を十二に修して無明、種を抜く、業生、已に除いて無言に果を得たり。

→ これは十二縁起という教理を観察して、我々の生死の迷いの苦しみの根本は無明にあることを理解し、無明を対治していつて涅槃に入るということである。これは縁覚乗（えんがくじょう）である。

このあと、第六から大乘仏教に入って、

第六他縁大乘心（たえんだいじょうしん）

無縁に悲を起こして大悲初めて発る、幻影に心を観じて唯識に境を遮す。

→ 無縁にとは、特定の縁を持たず、誰にでもという意味がある。これは法相唯識である。

第七覺心不生心（かくしんふしょうしん）

八不に戲を絶ち一念に空を観ず、心原空寂にして無相安樂なり。

→ これは心の不生を悟るということで、三論宗と言われている。

第八如実一道心（によじついちどうしん）

一如本浄にして境智俱に融ぜり、此の心性を知るを号して遮那と曰う。

→ これは天台宗が当てられており、自性清浄を説いている。

第九極無自性心（ごくむじしょうしん）

水は自性無し、風に遇うて即ち波だつ、法界は極に非ず、警めを蒙って忽ちに進む。

→ これは究極の本体も自性を持たないということ。我々はどうしても絶対なるものを求めるが、絶対なるものもそれ自体に本体はない。絶対は絶対を否定して、相対に翻るということで、水の本体は波として現象する。そしてその諸の現象の間に重重無尽の縁起を説くのが華嚴宗である。そして、最後に、

第十秘密莊嚴心（ひみつしょうごんしん）

頭葉は塵を払い真言は庫を開いて、秘宝忽ちに陳して、万徳即ち証す。

→ と密教の世界が説かれている。この『秘蔵宝鑰』の説明では、密教はとにかく「即身成仏」を果たす優れた教えであることが強調されており、密教の世界観は必ずしもここには表れていないかと思う。

では、密教の世界観、あるいは人間観とは、いったいどういうものなのであろうか。

### （3）秘密莊嚴住心を知る

十住心について最も詳しく明かしてあるのが『十住心論』だが、その「秘密莊嚴住心」の冒頭に、以下のように書いてある。

秘密莊嚴住心といふは、即ち是れ究竟じて自心の源底を覚知し、実の如く自身の數量を証悟するなり。謂わ所る、胎藏海会の曼荼羅、金剛界会の曼荼羅、金剛頂十八会の曼荼羅、是れなり。是の如くの曼荼羅に、各各に四種曼荼羅・四智印等有り。四種と言うは、摩訶と三昧耶と達磨と羯磨と是れなり。是の如き四種曼荼羅、其の数無量なり。刹塵も喩に非ず、海滴も何ぞ比せん。

（『十住心論』、『定本』第二卷、三〇七頁）

秘密莊嚴住心とは、究極的に自分の心の一番奥底を覚知し、自分の心の働き方が無限であることを悟るということである。これはどういうことか。「謂わ所る、胎藏海会（たいざうかいえ）の曼荼羅、金剛界会（こんごうかいえ）の曼荼羅、金剛頂十八会（こんごうちやうじゅうはつて）の曼荼羅、是れなり」。金剛頂十八会の曼荼羅は、金剛界曼荼羅と同じものと考えてよい。そうすると、まず、胎藏曼荼羅と金剛界曼荼羅の両部曼荼羅が提示されたわけである。

そして、「是の如くの曼荼羅に、各各に四種曼荼羅・四智印等有り。四種と言うは、摩訶と三昧耶（さんまや）と達磨と羯磨（かつま）と是れなり」と、さらに四種曼荼羅も挙げられている。「摩訶曼荼羅」は大曼荼羅と言われる。「達磨」は法なので法曼荼羅と言われるものである。「是の如き四種曼荼羅、其の数無量なり。刹塵も喩に非ず、海滴も何ぞ比せん」。「刹塵」とは国土をすり潰して塵にしたその塵の数で、莫大な数、「海滴」も海を滴で数えるという莫大な数を示すが、それでも比較にならないと言っている。

したがって、ここには「胎藏海会の曼荼羅」と「金剛界会の曼荼羅」が挙げられているだ

けでなく、「大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、達磨曼荼羅」の四種曼荼羅も挙げられているわけである。そして「是の如くの曼荼羅に、各各に」とあり、「胎蔵曼荼羅」「金剛界曼荼羅」の諸仏・諸尊の一人ひとりが四種曼荼羅を發揮しているという。その全体が自分の心の奥底だと、そう空海は明かしているわけである。

## II 曼荼羅とは何か

そもそも曼荼羅とは、サンスクリット語の *maṇḍala* の音写である。曼荼羅というと、すぐに絵図を思い出すが、必ずしも絵図が曼荼羅とは限らない。むしろ絵図に表わす以前の諸仏・諸尊そのもの、存在そのものに曼荼羅というものがあるのである。

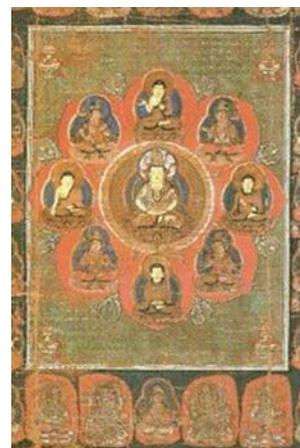
「曼荼羅」の意味について、たとえば『大日経』では「諸仏を発生する漫荼羅」を「極無比味、無過上味」とし、この上なく素晴らしいものという意味を挙げている。

また、空海の『太上天皇灌頂文（だじょうてんのうかんじょうもん）』という、前の天皇に灌頂を受ける（真言密教で阿闍梨が法門を受ける際の儀式）ときに制作された文があるが、その中で「恒沙」すなわちガンジス川の岸辺の砂ほどの大変な量と同じくらい莫大な数の徳を具足して欠けることがない、だから曼荼羅と言ひ、「曼荼羅とは、無比味、無過上味」のこととここは『大日経』から取っているが、同時に「輪円備足」で全部備わっていると言っている。ここでは大日如来に無数の功德が備わっていることを「曼荼羅」というと説明している。

このようにいろいろな説があるが、最後の宗学者とも言える、高野山大学の教授から真言宗御室派の管長になられた小田慈舟氏は、曼荼羅とは「新訳には輪円具足という」と説明されている。そこで私は、「輪円具足」、つまり全部揃っている、というのが曼荼羅の意味だと思っている。

曼荼羅に関わる有名な言葉として、空海の『御請来目録』の「密蔵、深玄にして翰墨、載せ難し」がある。密教の悟りの世界は非常に深くて言葉で表せないという。そして「更に図と画を仮りて、悟らざるに開示す」と、絵図で示すと言っている。逆に言えば、曼荼羅で描かれている世界とは、心の内証の世界、自ら内に悟った世界そのもの、要するに空海が「自心の源底」として示した世界そのものであり、それが本来の曼荼羅で、それを絵に写したのも曼荼羅と言われるという話になるわけである。

『十住心論』では「胎蔵海会の曼荼羅」として、『大日経』の「住心品」の「序分」を引いて『大日経』の諸仏・諸尊の集合のあり方を示している。大日如来の説法の会座に、一九の執金剛および四菩薩を上首とし、それらの無数の眷属(けんぞく)も集結している様子が描かれている。これは我々がよく見る胎蔵



胎蔵界曼荼羅(作者不詳)  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

曼荼羅とは多少、様子が違うが、要は胎蔵曼荼羅のことを意味していると思う。

一方、「金剛界会の曼荼羅」としては、金剛智訳『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經（こんごうぶろうかくいっさいゆがゆぎきょう）』という經典の冒頭部分（「序品」の「序分」）にその様子が述べられている。ここには金剛界曼荼羅の全体を九つに分割して作られた絵図の中心にある、「成身会（じょうしんえ）」と言われるところの諸仏・諸尊と同等の諸尊が描かれている。

したがって、「胎蔵海会の曼荼羅」「金剛界会の曼荼羅」は「両部曼荼羅」の絵図に描かれる諸仏・諸尊の、そのもとの各身そのものの全集合という話になると思う。そういう諸仏・諸尊の各身が自分の中にあるという話である。

そのことは『即身成仏義』でも同じように説明していると思うので、この自己の心の中の諸仏・諸尊のあり方を理解するために、少し『即身成仏義』の説を覗いてみたい。



金剛界曼荼羅(作者不詳)  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

### III 『即身成仏義』の曼荼羅思想

「即身成仏」というと、どうしてもこの世のうちに成仏できること、この身に即して成仏することを説くものと思われると思う。ふつうの大乗仏教、特に法相宗、唯識の思想などでは生死輪廻において、死んでは生まれ、死んでは生まれしながら修行して、莫大な時間をかけてようやく仏になれると説く。それもじつは宗派によって考え方が違うのであるが、空海は『即身成仏義』の前半においては、「顕教は修行に大変な時間がかかるけれど、密教によればこの世のうちに仏になることができる」と確かに謳っている。

しかし、『即身成仏義』の後半、「即身成仏頌（そくしんじょうぶつじゅ）」（頌は詩のこと）を提示し、その後の解説部分では、この世のうちに成仏できるということよりも、ある人が他の一切の人と相即・渉入し合っていることが即身の意味だという説明に変わっていく。

実際に「即身成仏頌」という詩の中に「重重帝網（じゅうじゅうたいもう）のごとくなるを即身と名づく」とあるのである。「帝網」とは帝釈天の宮殿の天井に掛かっている飾りの網のことで、網の目の一つひとつに宝石が括りつけられており、その宝石が互いを映し合う様子をたとえとしている。つまり、2枚の鏡を照らし合わせると互いに無限に映し合うように、網の目の一つひとつに付けられた宝石が互いに映し合い、マルチプルに多重に映し合って、そこに重重無尽の関係性が現前する。そのあり方を「重重帝網のごとく」と言っているわけであり、そのような関係性の中で自己が存在しているということこそが、「即身成仏」の「即身」の意味だと言うのである。

つまり、「即身成仏」の「即身」はこの世で成仏できるということではない。自己が重重無尽の関係性の中で存在し、そして重重無尽の関係の全体も自己であるという、それが「即

身」の意味であり、それを自覚するのが「成仏」だというのである。

### (1) 「即身成仏頌」に見る「六大無礙」

「即身成仏頌」とはそのような内容を説く詩である。それは、次のようなものである。

六大無礙にして常に瑜伽なり、四種曼荼、各の離れず、  
三密加持して速疾に顕わる、重重帝網のごとくなるを即身と名づく。  
法然に薩般若を具足して、心数心王、刹塵に過ぎたり、  
各の五智無際智を具して、円鏡力の故に実覚智なり。

(『定本』第三卷、一八～一九頁)

第一句、「六大無礙(ろくだいむげ)」の「六大」とは、一般に地大・水大・火大・風大・空大・識大の物質的なものと精神的なものの要素をいうと解されている。空海は「宇宙は六大で成り立っていると説いた」などと言われるが、じつはそうではない。『即身成仏義』を見ると、この「六大」は次の經典によって理解すべきだと指示されている。

大日経に謂う所の、我れ本不生を覚れり、語言の道を出過し、  
諸過に解脱を得て、因縁を遠離し、空は虚空に等しと知る、是れ  
其の義なり。 (同前、一九頁)

又た金剛頂経に云く、諸法は本不生なり、自性は言説を離れたり、  
清浄にして垢染無し、因業なり、虚空に等し。此れ亦た大日経に同じ。  
(同前、二〇頁)

『大日経』も『金剛頂経』もほぼ同じようなことを説いているが、要するに「地大」は本不生ということであり、「水大」は分別・言語を離れていること。「火大」は諸過に解脱を得て自性清浄、本性は清らかであること。「風大」は因縁を遠離すること。これは不生不滅というか、有為の縁起の世界を超えているということである。「空大」は虚空に等しく、何も常住の本体なるものがないこと。「識大」は「我れ本不生を覚れり」の「覚れり」に読む。これが「六大」の本当の意味だと言っている。したがって、「六大」とは決して物質的、心理的な元素ということではなく、このように本不生であり、言説を離れ、煩惱を離れた自性清浄などのあり方と言える。

さらに後の方で空海は、この「六大」は法界体性、つまり全世界の本性、本体そのものであると言っている。したがって六大はその法界体性のさまざまな徳性、功德を表していることになる。

この「法界体性」は、しかも能生、世界を生み出すものである。それに対して、生み出さ

れるもの（所生）は、一切の仏及び一切の衆生等の「四種法身（ししゅほっしん）」であり、要するに諸仏・諸尊はその「法界体性」を基盤として成立している。あるいは「三種世間」もそこに成立していると言われる。この三種は「智正覺世間」が悟りを開いた人、「器世間」が環境世界、国土。「衆生世間」が凡夫である。つまり、諸仏諸尊・諸衆生・およびそれらが住まう国土であり、要は現象の一切を「三種世間」という言い方で表現しているわけで、それが「所生（しよしょう：生み出されたもの）」である。法界体性が「能生（のうしょう：生み出すもの）」で、一切の現象が「所生」である。

ただし、「能生・所生」については、この辺りが密教の難しいところで、空海は以下のように明かしている。

能所の二生有りとは雖も、都（すべ）て能所を絶えたり。法爾にして道理なり。  
何の造作か有らん。能所等の名も皆な是れ密号なり。常途の浅略の義を執して種  
種の戲論を作すべからず。 (同前、二三頁)

「能生・所生」という言葉を使っているけれども、じつは「都（すべ）て能所を絶えたり」として、「能生・所生」という相対的な関係性ではないと言っている。「法爾にして道理なり。何の造作か有らん」、もとより不二一体、一つである。「生む」「生まれる」という関係ではない。「能所等の名も皆な是れ密号なり」で、ここの能生・所生とは、秘密の言葉だと言っている。そして「常途の浅略の義を執して種種の戲論を作すべからず」、つまり「能所」とあるからといって「生むもの」「生まれるもの」という関係で見えてはいけない、という。したがって、「法界体性」を基盤としながら、そこであらゆる現象世界が成立しているということであって、ここに発出論的な内容を見てはいけないのである。

## (2) 「六大無礙」から「事事無礙法界」、「人人無礙法界」へ

そのような説明を受けて、『即身成仏頌』の第一句、「六大無礙常瑜伽（ろくだいむげにしつねにゆがなり）」の意味の結論を見てみよう。そのことが、次のように説かれている。

是の如くの六大の法界体性所成の身は、無障無礙にして、互相（たがい）に渉入し相応せり。常住不変にして、同じく実際に住す。故（かるがゆえ）に頌に、六大無礙常瑜伽、と曰う。解して曰く、無礙とは渉入自在の義なり。常とは不動、不壊等の義なり。瑜伽とは翻じて相応と云う。相応渉入は即ち是れ即の義なり。  
(同前、二三～二四頁)

このように「六大」である「法界体性」において成立しているところの「身」、これは「心」に対する「身体」というよりも、仏身であれ、衆生身であれ、「個々の人」を意味するわけだが、そのそれぞれの「身」すなわち人について、「無障無礙にして、互相（たがい）に渉

入し相応せり。常住不変にして、同じく実際に住す」と言っている。「常住不変」とはそういう法界体性において成立しているあり方が不変ということで、「故(かるがゆえ)に頌に、六大無礙常瑜伽、と曰う」としているのである。

したがって、「六大無礙常瑜伽」は、「六大の法界体性所成の身」、つまり諸仏・諸尊・諸衆生それぞれの「身」が常に妨げ合うことなく、互いに入り込んで、そして結びついているという、そのことを言っていると、空海はきちんと『即身成仏義』の中で説明しているわけがある。

さらに「解して曰く、無礙とは涉入自在の義なり。常とは不動、不壊等の義なり」と、その涉入自在のあり方は変わらないとし、「瑜伽とは翻じて相応と云う。相応涉入は即ち是れ即の義なり」と、「即身成仏」の「即」は「この身に即して」「この世のうちに速やかに」という意味ではなく、「相応涉入(そうおうしょうにゅう)」のことであると説明している。

もう一度いうと、無礙にして常に瑜伽なのは「六大なる法界体性所成の身」であり、「六大」が常に無礙というわけではない。「身」とは諸仏・諸尊・諸衆生の各個体のことなのである。

そして、先ほど見たように「即身成仏頌」前半の第四句に「重重帝網のごとくなるを即身と名づく」とあり、この句を解説する箇所では、自と他、衆生と仏等の間で、縦横重重にして以下のように言っている。

彼の身は即ち是れ此の身なり、此の身は即ち是れ彼の身、仏身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ仏身なり。不同にして同なり、不異にして異なり。

(同前、二八頁)

他者はすなわち自己であり、自己はすなわち他者である。「不同にして同なり」、それぞれ掛け替えのない存在だけれども結びついていて、法界体性の地平では一体である。そして「不異にして異なり」、一体だけれども、それぞれ主体として掛け替えのない存在だということを行っているわけである。

あるいは、「アサンメイチリサンメイサンマエイ ソワカ」(無等三等三平等莎婆訶)という真言を示して、その意味を次のように明かしている。

初の句義(アサンメイ)は無等と云う、次(チリサンメイ)は三等と云う。後の句(サンマエイ)は三平等と云う。仏法僧、是れ三なり。身語意、亦た三なり。心仏及び衆生、三なり。是の如くの三法は、平等平等にして一なり。一にして無量なり、無量にして一なり。而も終(つい)に雑乱せざるが故に、重重帝網名即身と曰う。

(同前、二九頁)

「アサンメイ」は「無等」、「チリサンメイ」は「三等」、後の句の「サンマエイ」は「三平等」という意味だと空海は説明している。その「三」については「仏法僧、是れ三なり。身語意、亦た三なり。心仏及び衆生、三なり」とある。心仏衆生の三無差別は『華嚴経』の言葉である。そして「是の如くの三法は、平等平等にして一なり。一にして無量なり」。つまり、平等にしてしかも無量の差別がある。「無量にして一なり。而も終（つい）に雑乱せざるが故に」それぞれはそれぞれとして存在している。そこを「重重帝網のごとくなるを即身」と名づくという言葉で表していると言っている。したがって、これは自他の身（各人）が重重無尽の関係性の中で結ばれていることを表わしていると言えよう。

華嚴宗では「事事無礙法界（じじむげほっかい）」ということを使う。「事法界」「理法界」「理事無礙法界」「事事無礙法界」という四つの法界があるが、「事法界」は現象世界のことであり、「理法界」は、本性、本体のこと、先ほどの言葉で言えば法界体性のことである。「理事無礙法界」とは、その「理」と「事」とが融け合っている世界である。その「理事無礙法界」から「理」という絶対が消えて「事事無礙法界」に進む。しかし空海がこのように「重重帝網名即身」と説かれていることは、「事」を諸仏・諸尊・諸衆生の「身」つまり「人」において捉えていると思う。したがって、この世界を華嚴の事事無礙法界になぞらえて言えば、「人人無礙法界」と言えるのではないかと思うのである。

#### IV 『吽字義釈』『秘藏宝鑰』に見る曼荼羅構造

##### (1) 『吽字義釈』の「麼」字の解説

そういう自他の構造は、空海の他の書物にも見ることができる。まず、『吽字義釈（うんじぎしゃく）』の「麼」字の深い意味を明かす一節である。

若し麼字の吾我門に入れば、之に諸法を撰すること、一一の法として該ねざること無し。故に經に云く、我れ則ち法界なり、我れ則ち法身なり、我れ則ち大日如来なり、我れ則ち金剛薩埵なり、我れ則ち一切仏なり、我れ則ち一切菩薩なり、我れ則ち縁覚なり、我れ則ち声聞なり、我れ則ち大自在天なり、我れ則ち梵天なり、我れ則ち帝釈なり、乃至、我れ則ち天龍鬼神八部衆等なり。一切の有情非情は、麼字にあらざること無し。是れ則ち一にして而も能く多なり。小にして而も大を含まず。故に円融の実義と名づく。

（『吽字義釈』の「麼」字の解説、『定本』第三卷、六六～六七頁）

『吽字義釈』は、一般には『吽字義』として知られているが、松長有慶先生が訳注シリーズを出されていて、その中で『吽字義釈』がよいのではないかとされているので、私もそれを採用してみた。この書物は、「吽」という字を haum と分解して、それぞれの母音、子音の深い意味を解説していく。haum の m は「マ」という字となり、漢字で示すと「麼」字

であるが、それは「アートマン (ātman)」を表わしている。しかし、アートマンの通常の意味ではない、深い意味は、一切の他者が自己だということを表わしているというのである。

## (2) 『秘蔵宝鑰』の「秘密莊嚴心」

また、『秘蔵宝鑰』の「秘密莊嚴心」には次のような頌（詩）がある。

九種の住心は自性無し、転深転妙なれども皆な是れ因なり。  
真言密教は法身の説、秘密金剛は最勝の真なり。  
五相五智法界体なり、四曼四印、此の心に陳ず。  
刹塵の渤駄は吾が心の仏なり、海滴の金蓮は亦た我が身なり。  
一一の字門、万象を含み、一一の刀金、皆な神を現ず。  
万徳の自性は輪円して足れり、一生の得証は莊嚴の仁なり。

（『定本』第三卷、一六七～一六八頁）

4行目に「刹塵の渤駄は吾が心の仏なり、海滴の金蓮は亦た我が身なり」とあるが、「刹」はサンスクリット語の「kṣetra」を音写したもので国土を意味する。刹塵とは、国土をすり潰して塵にしたほどの莫大な数ということで、自分の心の中にはそれほど無数の仏がおられると言っている。「海滴の金蓮」は海を滴で数えるということで、これも莫大な数を表現している。「金蓮」とは金剛部および蓮華部に属する諸尊のことで、それらの諸尊も自分自身だということである。ここで心と身を二元的に見るべきでなく、どちらも要は人のことを言っていると見てよい。なお、胎蔵曼荼羅では、諸尊が仏部・金剛部・蓮華部の三部に分けられており、金剛界曼荼羅では、諸尊が仏部・蓮華部・金剛部・宝部・羯磨部の五部に分けられている。そこで「渤駄」は仏部のこととの理解もある。解釈はいろいろあろうが、胎蔵界・金剛界のすべての諸仏諸尊が自己にある、自己である、ということである。

要するに、「自心の源底」の中に諸仏・諸尊、おそらく諸衆生も含めて、一切他者が存在している、一切の他者は自己である、ということを行っているわけである。

## V 四種曼荼羅とは何か

一方で、その一人ひとりに四種曼荼羅があると、『十住心論』の冒頭で言われていた。胎蔵海会の曼荼羅と金剛界会の曼荼羅の、その各々に「四種曼荼羅・四種智印」があるという。

「四種智印」は曼荼羅を主観の側から認知したものであり、「四種曼荼羅」と変わらないものである。では、この「四種曼荼羅」とはいったい何なのか。

「四種曼荼羅」とは、大曼荼羅・三昧耶曼荼羅・法曼荼羅・羯磨曼荼羅という四つの曼荼羅である。これについては、やはり『即身成仏義』の中に説明がある。

若し金剛頂經に依って四種曼荼羅を説かば、

一には、大曼荼羅。謂く、一一の仏菩薩相好の身なり。又た其の形像を綵画（さいえ）するを大曼荼羅と名づく。又た五相を以て本尊の瑜伽を成ずるを、又た大智印と名づく。

二に、三昧耶曼荼羅というは、即ち所持の標幟、刀劍、輪宝、金剛、蓮華等の類い是れなり。若し其の像を画するをも亦た是れなり。又た二手を以て和合し、金剛縛して成印を発生する、是れ亦た三昧耶智印と名づく。

三に、法曼荼羅は本尊の種子真言なり。若し其の種子字、各の本位に書する、是れなり。又た法身三摩地と及び一切契經の文義等をも、皆な是れ亦た法智印と名づく。

四に、羯磨曼荼羅というは、即ち諸仏菩薩等の種種の威儀事業等なり。若しは鑄、若しは捏等をも亦た是れ、亦た羯磨智印と名づく。

（『定本』第三卷、二四～二五頁）

まず、大曼荼羅については、「一一の仏菩薩相好の身なり」とある。したがって、絵が大曼荼羅なのではなく、まずは諸仏・諸尊の姿かたちの全集合が大曼荼羅なのである。その後、「又た其の形像を綵画（さいえ）するを大曼荼羅と名づく」とあって、絵に描いたものも曼荼羅なのだけれども、しかしその絵に描いたもの以前に、そのそれぞれの相好そのものがあるわけである。

次に、三昧耶曼荼羅についてである。「三昧耶」にはいくつかの意味があるが、ここは象徴を意味している。「所持の標幟」が象徴を意味しており、その例として「刀劍、輪宝、金剛、蓮華等の類い是れなり」と挙げられている。薬師如来は薬の壺を持っている。これは衆生の病気を治そうという、その心を持ち物で表わしている。不動明王は劍を持ち、相手の煩惱を断ち切ろうとする大悲の心を表わす。そういう象徴の全集合が三昧耶曼荼羅である。その後、「若し其の像を画するをも亦た是れなり」と、それらを描いたものも曼荼羅とするが、それ以前に持ち物の標幟の全集合があるということである。そして「又た二手を以て和合し、金剛縛して成印を発生する、是れ亦た三昧耶智印と名づく」として、印を結ぶこともそれを行じている側から言えば三昧耶智印であり、その印そのものを全部集めれば三昧耶曼荼羅になるであろう。

第三に、法曼荼羅。「法曼荼羅は本尊の種子真言なり」とあり、この「法」は「ダルマ」のことである。「ダルマ」にはいろいろな意味があるが、その一つに説法、教えという意味もあり、それは言葉の世界になってくる。特にここでは「本尊の種子真言」として、大日如来を「ア」や「バン」という文字で示すように、一つの文字が菩薩や仏を表わしている。ただし、「若し其の種子字、各の本位に書する、是れなり」と、それを書いたものも曼荼羅だが、書



く以前にそういう言葉群があるということである。「又た法身三摩地と及び一切契経の文義等をも、皆な是れ亦た法智印と名づく」というのは「一切契経の文義」が教え、説法のすべてで、それを了解することを「法智印」としており、その教えの背景には悟りの世界がある。それが「法身三摩地（ほっしんさんまじ）」である。つまり、悟られた真理、およびそれを言葉に表したものの、その一切が法曼荼羅であると言っている。その中で、代表的なのが種子（字）であり、一つひとつの字がいろいろな意味を持っているというのが密教の言語観である。

そして、第四は羯磨曼荼羅。「羯磨」は「カルマ」の音写で行為、行動を意味する。「即ち諸仏菩薩等の種種の威儀事業等なり」で、「威儀」とは仏教では四威儀「行、住、坐、臥」を指し、行くも、とまるも、坐るも、臥すも、のことを意味し、すなわち日常の所作すべてを意味する。「事業」は働きである。そして「若しは鑄、若しは捏等をも亦た是れ、亦た羯磨智印と名づく」と続くが、「鑄」は鑄造された仏、「捏」は泥を捏ねて作られた仏、つまり「カルマ」は作用、働きなので、平面の絵図には表現されず、立体曼荼羅で表現することになる。そういうことを意味している。

こういうものが四種曼荼羅である。「大曼荼羅」は身像の全集合、「法曼荼羅」は言語の全集合、「三昧耶曼荼羅」は象徴の集合で、象徴しているのはその人の意向、意思であるから、つまりは心の全集合といえよう。「羯磨曼荼羅」はそれらの活動・作用の全集合ということになる。仏教では行動のことを身体の行為、言葉の行為、心の行為で見ていくので、これを「身・語・意」の三業という。そして、仏の活動は我々には分からないので、それは三密になる。その三密のすべてが、身・語・意および業（密）という四種曼荼羅として表現されているので、四種曼荼羅を言い換えれば三密になるのではないかと思う。

しかも『十住心論』の冒頭では、先ほどの「自心の源底」を示した文の後に、以下のような解説をしている。

是の如くの三部の諸尊、其の数無量なり。一一の諸尊に各の四種曼荼羅を具す。

仏部は即ち身密、法部は即ち語密、金剛部は即ち心密なり。

（『定本』第二卷、三〇八頁）

いろいろな諸尊が無量にいて、その一人ひとりが四種曼荼羅を持していると説明しており、このことは言い換えれば、諸仏のそれぞれが三密を発揮していると了解すればよいのではないかと思う。

いずれにしても、『秘密曼荼羅十住心論』の冒頭では、「自心の源底」において、まず「胎藏曼荼羅」「金剛界曼荼羅」の両部の曼荼羅の諸仏・諸尊がいて、その諸仏・諸尊の各々が四種曼荼羅、言い換えれば三密を発揮している。そういう世界観、構図が描かれていたわけである。

したがって、私としてはここに曼荼羅の二重構造が描かれていると考えている。

## VI 四種曼荼羅の交響

「重重帝網のごとくなるを即身と名づく」ということで、諸仏・諸尊は各身同士が渉入・相応していた。同時に、その各身は四種曼荼羅を具えている、あるいは三密を発揮しているわけであるから、各身が持っている四種曼荼羅、あるいは三密も相互に渉入・相応することになるものと思われる。そうすると、「自心の源底」の曼荼羅世界とは、実に立体的で動態的、重重無尽の曼荼羅世界ということになる。そのことを少し見ていきたい。

「即身成仏頌」の前半の第一句は「六大無礙にして常に瑜伽なり」であり、その次の第二句に「四種曼荼羅、各々離れず」という言葉が置かれている。これについては以下のように説明されている。

是の如くの四種曼荼羅、四種智印は、其の数無量なり。一一の量、虚空に同なり。彼れ、此れを離れず、此れ、彼れを離れず。猶おし空と光との無礙にして逆（さか）えざるが如し。  
（『定本』第三卷、二五頁）

このように四種曼荼羅、四種智印は無限のものがあるとして、「彼れ、此れを離れず、此れ、彼れを離れず」と続くが、問題はこの句をどのように了解するかである。四種曼荼羅同士の中で離れないということも考えられる。それから四種曼荼羅と「身」の主体、あるいは法界体性まで戻ってもよいかもしれないが、それと離れないということも考えられる。または、両部曼荼羅の諸仏・諸尊・諸衆生の各々の四種曼荼羅が互いに離れないと理解しても差し支えないと思われる。

実際問題として、次の第三句は「三密加持すれば速疾に顕わる」であったが、その説明には以下のようにある。

一一の尊等に刹塵の三密を具して、互相（たがい）に加入し、彼れ此れ摂持せり。衆生の三密も亦復た是の如し。故に三密加持と名づく。若し真言行人有って此の義を觀察し、手には印契を作（つく）って、口に真言を誦し、心、三摩地に住すれば、三密相応して加持するが故に、早く大悉地を得。（同前、二五頁）

一一の尊等に無限の三密、言い換えれば四種曼荼羅を具えていて、その三密が互いに加入し、互いに摂持（しょうじ）している。ここでは互いに加入し、互いに支え合って持（たも）っている、これが加持だと言っている。そういう中で真言行人が、「手には印契を作（つく）って、口に真言を誦し、心、三摩地に住すれば」と、三密加持すれば即身成仏するという。

ともあれ、一一の諸尊の三密が「互相に加入し、彼此摂持せり」と、そういうことも説かれているのである。

そして第四句には「重重帝網のごとくなるを即身と名づく」とあったわけであり、前にはこの句に対して各身が渉入相応しているということを読んだ。その説明は以下のとおりである。

仏法僧、是れ三なり。身語意、亦た三なり。心仏及び衆生、三なり。是の如くの三法は、平等平等にして一なり。一にして無量なり、無量にして一なり。而も終(つい)に雑乱せざるが故に、重重帝網名即身と曰う。 (同前、二九頁)

実はここに「身語意(しんごい)」とあり、とすれば三密もまた一にして無量、無量にして一なる構造を有していたのである。すなわち、重重無尽の関係性の中にあるものの中に、各身のみでなく、その各身の「身語意」の三密もまた含まれていると受け取ることができよう。

実際問題として、『即身成仏義』におけるこの第四句の説明の箇所の冒頭には、以下のよう

に説かれている。  
重重帝網名即身とは、是れ則ち譬喩を挙ぐ。以て諸尊の刹塵の三密の円融無礙なることを明かす。 (同前、二八頁)

「重重帝網名即身」という句は、「諸尊の刹塵の三密の円融無礙なること」を明かしているという。つまり重重帝網とは、一人ひとりの無量・無数の「身語意」の働き、言い換えれば四種曼荼羅の円融無礙(えんゆうむげ)なることを明かすものとしているのである。

そうであれば、各身の重重無尽の渉入相応とは「身」だけではなく、その「身」に具有される四種曼荼羅、言い換えれば三密の、重重無尽の渉入相応ということにも他ならない、ということになるかと思う。

ちなみに宗学的には、重重帝網の関係にあるものとして、体(六大無礙常瑜伽)・相(四種曼荼各不離(ししゅまんだらおのおのはなれず))・用(三密加持速疾顯(さみつかじすればそくしつにあらわる))のすべてが含まれると言われている。

これが「秘密莊嚴住心」の冒頭に明かされた「自心の源底」の内実である。言い換えれば、曼荼羅の二重構造の世界で、無数の個体、諸身の間で渉入相応しているとともに、その諸尊一人ひとりの無数の三密も交響している世界であり、すなわち立体的・動的・重重無尽的曼荼羅世界ということである。それが「自心の源底」だと、そのように空海は示されたわけである。

そのことは『十住心論』の「帰敬頌」にも表れている。時間の関係上、今は詳しくは説明

できないが、「帰敬頌（ききょうじゅ）」の中に「是の如くの自他の四法身は、法然として輪  
円せる我が三密なり。天珠の如く渉入して虚空に遍じ、重重無碍にして刹塵を過ぎたり」  
（『定本』第二卷、三～四頁）とある。他者も、仏になった人も、凡夫も、四つの法身から  
なっているという。凡夫も本当は仏身そのものだけということである。しかもその四法身は  
「身語意」の三密を発揮していると思うが、もとよりそのすべてが自分の「身語意」の活動  
の中に入り込んでいる。自分の活動は自分だけではなく、他の一切の人の活動と協働しての  
ことだと言っている。その様子は「天珠の如く」、つまり帝釈天の宮殿の飾りの網に括り付  
けられた宝珠が互いに映し合って、そこに重重無尽の関係が現前するのと同じように、「渉  
入して虚空に遍じ、重重無礙にして刹塵を過ぎたり」と、「帰敬頌」の中で言われている。  
そこにも、今見てきたような世界観が、如実に表れていると見ることができよう。

## VII まとめ - 空海の曼荼羅思想といのち -

以上をまとめると、我々の自己は、自己を超越するもの、ふつうの大乗仏教で言えば真如  
や法性に当たるもので、空海の『十住心論』では法界体性において成立しているが、自己だ  
けではなく、同じ法界体性において他の人人も成立していて、その他の人人と、存在そのも  
のにおいても、働きにおいても、互いに加入し、彼此摂持し合っている。諸仏・諸尊・諸衆  
生のどの人も、一切の他者と互いに加入し、彼此摂持し合っている。そういう中で自己が維  
持されている、ということが描かれていたと思う。つまり、一切の他者の存在と働きを自己  
としているのが、自己の実相ということになる。

そこを標語的にいうと「曼荼羅即自己・自己即曼荼羅」ということになるかと思う。ただ  
し、その曼荼羅もいわゆる胎藏曼荼羅、金剛界曼荼羅の両部曼荼羅だけではなく、その構成  
員の各々が四種曼荼羅を具え、発揮しているという、両部曼荼羅と四種曼荼羅の二重構造と  
しての立体的・動的な、しかも重重無尽の関係の世界である。要は、一切の他者と相互に  
浸透し合い、協働し合っているなかに、「一個のいのち」はあるということである。

生命との関係というところでは、「いのち」というのはそういう構造を持っていると  
いうことを、空海の思想、人間観、世界観の中に汲み取ることができるのではないかと思う  
のである。

## 質疑応答

- Q1 手塚治虫の『火の鳥』における「即身成仏」はどう違うのか
- Q2 「般若心経」の龍樹はどのような位置づけになるのか
- Q3 密教は仏教の変化のなかでどのように生まれたのか
- Q4 密教の解釈と空海の神仏習合、政治との関りはどのように考えられるのか
- Q5 on-line：両部曼荼羅以外の経典が副次的な扱いになったのはどういう経緯からか
- Q6 on-line：「十四問答」は政治をどう述べたのか。なぜ『十住心論』にはないのか
- Q7 on-line：「即身成仏」と「平生業成」はどう違うのか
- Q8 on-line：空海の「即身成仏」の概念に輪廻や解脱は含まれるのか
- Q9 on-line：「他者」とは何か、どのように捉えられていたのか
- Q10 on-line：諸仏・諸尊はどのように「私」に関わるのか
- Q11 on-line：空海の生命思想にシンギュラリティはどう関係するのか
- Q12 竹村先生の仏教研究の到達点はどこなのか
- Q13 他者と相互に浸透し合わない現代の高齢者は仏教的にどう捉えられるのか

### Q1 手塚治虫の『火の鳥』における「即身成仏」はどう違うのか

手塚治虫の『火の鳥』という漫画では、穴の中に入ってひたすら念仏を唱え、そのまま亡くなることを「即身成仏」とする描写がある。それと今回の「即身成仏」は全く違うのか。自分を一切の世界と絶ってしまっただけでその状態で亡くなっていくことは、本来「即身成仏」とは言わないのか。

(竹村)

「成仏」というのは、日本では「お陀仏」とか死ぬことのように言われるが、本来はそうではない。唯識の説明でいうと、我々は八識から成り立っている。眼識・耳識・鼻識・舌識・身識が五感の識で、それに意識があり、ここまでは自覚している。しかし、唯識は意識の下に末那識(まなしき)・阿頼耶識(あらやしき)という世界も説いている。修行をすることで、その八識はすべて智慧に変わる。阿頼耶識は大円鏡智、末那識は平等性智、第六意識は妙観察智、五感の識はまとめて前五識というが、これは成所作智という智慧に変わる。この四智を実現すると仏になる。その四智は、未来にずっと相続されていくと見なされている。だから本来から言えば、たとえばミイラのような存在が即身成仏した者なのではない。

また、弘法大師のいうところでは、顕教は長い間修行しなければ八識が四智に変わることはない。しかし密教の優れた行法に基づいて修行すれば、この世のうちにすべての智慧が完成する。弘法大師の場合は四つの智慧ではなく、法界体性も智と見て、法界体性智を加えた五つの智慧で語るが、その智慧がこの世のうちに実現するというのが「即身成仏」のふつうの意味である。弘法大師はその「即身」をさらに捻って、他者といわば即している「身(み)」

という独特の解釈を示したわけである。

(質問者)

(『火の鳥』で)「即身成仏」とされているのは、仏教的には全く意味をなしていない修行ということか。逆にいうと、なぜ日本でそのような曲解が出てきたのか。

(竹村)

確かに日本では、土中で入定して仏に成るといふ修行を実践された方が何人かおられ、それらの人を即身仏と呼んでいるが、本来の仏教教理に照らすと、四智を実現しないと仏とは言えない。即身仏は多く湯殿山系の修験道などで多く見られるようで、その背景に空海の入定信仰もあるようだが、空海も入定することによって即身成仏したというわけでもなく、なぜ即身仏思想が日本で浸透するに至ったのか、私は承知していないのが実情である。

一方、「死ぬと仏になる」といふ観念についてであるが、仏教のなかに浄土教という一つの流れがあり、浄土教は念仏を唱えて阿弥陀様に救い取ってもらい、阿弥陀様の浄土に往生させていただくといふ教えである。本来はそこで阿弥陀様を前に修行をして悟りを開き、四智を完成して仏になる。しかし、親鸞は阿弥陀様が本願で我々を救ってくれる、死んだらすぐに仏になるという意味合いの教義を言われた。それが通俗的に理解されて、死んだら成仏すると言われるようになったのではないかと思う。

## Q2 「般若心経」の龍樹はどのような位置づけになるのか

仏教という「般若心経」であり、「般若心経」といふと龍樹になると思うが、龍樹はどこに入るのか。

(竹村)

龍樹は般若中観の立場で、中国に入ると三論宗になる。龍樹の『中論』と龍樹の弟子の提婆の『百論』、やはり龍樹が書いたと言われる『十二門論』の三つの論書を研究するのが三論宗である。したがって、空海の十住心においては、第七住心の「覚心不生心」の心の不生を覚るといふのが龍樹の世界ということになる。

(質問者)

密教とはまだ距離がある。

(竹村)

これはあくまでも弘法大師の判定なので、これが適切かどうかは、いろいろ考え方があろう。あくまでも弘法大師の考えに基づくと、密教の三つ前に位置づけられるということである。

## Q3 密教は仏教の変化のなかでどのように生まれたのか

私は、大乘仏教は唯識のような観念論的な教えであり、それに対して密教は個人の内面に掘り下げていくようなものではないかと思っていたが、本日の講演では、空海の実践的な活動、先生の言葉によると「立体的・動的・重重無礙(重重無尽)」ということだった。これは仏教の変化のなかでどのようにして生まれてきたのか。あるいは、空海が日本でそのよ

うに作っていったのか、あるいは仏教の故郷であるインド辺りで観念論だけではいけないということから密教という概念で実践的なものになっていったのか。

(竹村)

大乘仏教は、最初に経典が作られて広められる。『法華経』や『華嚴経』、『般若経』、『無量寿経』もそうだが、そこに説かれている思想を論理的、哲学的に整理していく。その一人が龍樹であり、中観派を形成した。もう一つは弥勒・無著・世親の唯識学派、瑜伽行派である。いずれも哲学的な側面が強いが、ただし哲学だけに限られているわけではない。そこでもやはり修行の仕方や、どのように人間が変わっていくかということなどもきちんと論じている。

よく『大日経』は般若系、中観系で、『金剛頂経』は唯識系と言われるが、密教はそういうものも踏まえており、特に空海の密教は中国の天台・華嚴をも踏まえている。先ほども少し述べたが、華嚴は事事無礙法界を説き、事と事とが妨げ合うことなく「松は竹である。竹は松である」というように溶け合っている。しかし、その溶け合っている内容は、体＝存在そのものにおいて「一即一切・一切即一」である。それから作用においても互いに作用し合っており「一入一切・一切入一」である。事事無礙法界の背景にもそういう体・用の関係が分析されている。空海は『大日経』や『金剛頂経』の説も咀嚼し消化し、それまでの仏教の教理も全部ふまえて、空海自身が曼荼羅の二重構造のような世界観を拓かれたのではないかと私は思っている。弘法大師の非常に創造的な哲学ではないかと思う。

(質問者)

つまり、日本のその時代の状況が、弘法大師をして実践的方向を作り上げたということか。

(竹村)

日本の状況、仏教の歴史的な展開の状況かもしれないが、多分に空海の天才的な資質によるところも大きいのではないか。あくまで私の個人的な感想である。

#### Q4 密教の解釈と空海の神仏習合、政治との関りはどのように考えられるのか

ゲートを通してゲートのキリスト教批判を研究しており、仏教には疎いが、講演を伺って私は先生の話を下のように受け止めた。間違っていたら教えていただきたい。

世のなかには数多の仏様が満ちている。それらの仏様は皆私の心の中にある。私の心はそういう仏様に満たされている。だから、私は仏でもある。そういう観点に立ってみると、私は「あなた」であり「あなた」は私である。空海が中国から日本に帰って来ると、日本には神道という宗教があり、人々は神々を信じている。中国の向こう側にはヨーロッパがあり、そこにはキリスト教があって、イエス・キリストや聖母マリアを信じている。

しかし、密教の立場に立ってみると、神道の神々もキリスト教のイエス・キリストも聖母マリアも仏の一つである。だから密教は、世界の宗教の中で一番広い宗教である。曼荼羅というのは宇宙そのものである。キリスト教ではイエス・キリストを超越神として捉えるけれども、そうではない。すべては内世界的な、そういう風に神々を捉えなければならない。そ

れが空海の教えかと、先生のお話を伺って思った。どこか違うだろうか。

(竹村)

拝聴した限り、大きな間違いはないのではないかと思います。問題は「私の心のなかに」というときの「心」をどう捉えるかということである。そこには非常に大きな問題が一つあると思う。しかし大筋は言われるとおりでないかと思う。

(質問者)

空海によって神仏習合がかなり進められたが、それはなぜだったのか。

(竹村)

両部神道で神道が言葉を得たと言われるが、法華の方にも山王神道などがないわけではない。それはやはり仏教では、絶対者、究極の存在にあたるものが空性であり、空性にしていろいろな姿かたちをとって現れるという考え方が根本にあるので、習合が可能になるのだと思う。

(質問者)

桓武天皇が長岡京から平安京に遷都したときのいろいろな理由の一つに、奈良では仏教の力が強くなり過ぎて政治に介入したということがあると思う。それに対して桓武天皇はできるだけ仏教の力を削ぎたいと思っていたけれども、最澄や空海の天台宗、真言宗は政治にそれほど介入しないものとして歓迎したと理解している。それは正しいか。

(竹村)

私は歴史にはあまり詳しくないので、断定的なことは言えないが、最澄も空海も政治に全く関わらなかったわけではない。結構、政治に関わっていると思う。特に空海は宮中とも相当関わっている。しかし、それだけにこだわったわけではなかった。最澄は比叡山、空海は高野山という山を、自分の心のなかに持っていた。したがって、政治にのめり込むということはなかった。最澄にしても空海にしても、自分のなかで政治と宗教のバランスが取れていたものと思う。それは奈良の時代とは少し様相が違っただろうと思う。

(質問者)

空海の場合は、最初は高雄の神護寺にいて、それから高野山へという、御所から遠いところにいた。宮廷から入ってくれと言われて東寺に行ったが、本当は世俗から離れた山の中にいたいと思ったのではないか。

(竹村)

そういうところだと思うが、真相は空海に聞いてみないとよく分からない。

#### Q5 on-line : 両部曼荼羅以外の経典が副次的な扱いになったのはどういう経緯からか

両部曼荼羅(胎蔵界・金剛界)を教えの中心に置いて、その他の経典を副次的なもの(雑密)に整理したのは、空海自身か師匠の恵果だったのかは、未だ諸説あるようだが、どうお考えか。両部曼荼羅の考えを中心に整理しているが、その他の経典は副次的なもの(雑密)に整理したのはどのような経緯があったのか。

(竹村)

『大日経』、『金剛頂経』以前の経典、特に雑蜜といわれる経典は、密教と大乘仏教、あるいは密教以外の仏教が混在して説かれている経典になる。それに対して、やはり『大日経』、『金剛頂経』を純粋な密教(純蜜)の経典として重視したが、これはやはり恵果あたりからか、もしかすると恵果以前の誰かもいるかもしれない。しかしともかく『大日経』と『金剛頂経』は全く別系統のもので、これを統合して一つの密教にしたのは恵果だと言われている。そういう意味では、すでに恵果の時代から『大日経』、『金剛頂経』を重視する、そこに純粋な密教があるという立場は始まっていたと私は思う。

**Q6 on-line : 「十四問答」は政治をどう述べたのか。なぜ『十住心論』にはないのか**

『十住心論』と『秘蔵宝鑰』の違いの一つとして、『秘蔵宝鑰』には「十四問答」があるが『十住心論』にはない。弘法大師空海はこの問答で政治について述べることで、どのような「心」や政治の在るべき姿を述べようとしたと解釈すべきか。また、なぜ『十住心論』にこの問答はないのか。

(竹村)

『秘蔵宝鑰』では第四住心、声聞乗の教理の説明の後に確かに「十四問答」と言われるものが置かれている。それは仏教を政治上、蔑ろにしてはならないということが中心になっている。私は『秘蔵宝鑰』の解説書も書いているが、そこは仏教の教理に入っていないので省略した。私はあまりその辺りをよく読んでいないので、中身については判断できない。それをよく知らないのが実情である。ただ、仏教を蔑ろにしてはいけない、儒教を重視して仏教を否定することはいけない、仏教は非常に重要な教えであり、国民の福利に資するものでもあるということが強調されていると思う。

それから、『十住心論』にこれがないのはなぜかというのは、私は空海ではないのでよく分からないが、いろいろな説はある。中には正式に朝廷に提出したのは『秘蔵宝鑰』で、『十住心論』はじつはその資料集であると言う人もいる。だから『秘蔵宝鑰』の方にそういう政治との関係も入れたのだという説もある。ただ、私は『十住心論』の論の最初に置かれた「帰敬頌」が非常に充実したものであり、『秘蔵宝鑰』の方はやはり簡略なので、『十住心論』が単なる資料集とは思えない。

では、なぜ『十住心論』に「十四問答」がないのかというと、これは全く私の考えだが、「十四問答」は官僚の心構えを説いたのではないかと思っていて、『秘蔵宝鑰』はそういう官僚たちを相手にして提出したのではないか。それに対して『十住心論』はきちんと天皇様、天子様に差し上げたのではないかと考えている。『十住心論』のほうには、国王はどういう心を持つべきか、あるいはどういう治世をするべきか、そういうことを詳しく書いている。それは『秘蔵宝鑰』にはない。そういう意味では、『十住心論』も天皇様に対して「国王たるべきものはどういう存在であるべきか」ということを縷々論じていると思う。そういう意味で、官僚向けと天皇向けと使い分けているのではないか。しかし、これはあくまでも私の

当面の解釈であり、どうしてだったのかは定かではない。

### Q7 on-line : 「即身成仏」と「平生業成」はどう違うのか

「この世のうちに成仏する」という言葉をお聞きして感じたのが、浄土真宗の教義である「平生業成（へいぜいごうじょう）」との共鳴である。東洋大学（確か本願寺とも縁の深い井上円了が創設者）にもいらした先生として、この日本仏教の通奏低音とも言えそうな、「死んでからでは遅い」、「死んで成仏するのではない」という姿勢を、どう捉えられているのか。

（竹村）

井上円了は東本願寺の方で真宗大谷派の長岡の末寺の長男として生まれ、明治20年に哲学館という哲学教育をベースにした学校を創設し、これが今の東洋大学になっている。そこで教鞭をとっていた者として、日本仏教の「死んでから成仏するのではない」という姿勢をどう捉えるか、という問いである。

日本では「即身成仏」に近い教えはいろいろなところで説かれている。真宗の場合は「平生業成」もあるし、他には「弥勒便同」というものもある。弥勒は成仏の一步手前にいる菩薩で、信を決定したら成仏の一步手前まで至る。そして、死んだら仏になる。それから、「如来等同」もあり、この世のうちに如来と等しいということも真宗では言うわけである。

あるいは、一遍の時宗では「機法一体」で、名号を唱えるなかで阿弥陀仏と一体化することまで言っている。

このように日本仏教では、真言宗の他の宗派でもこの世のうちに成仏するということが結構言われており、確かに質問者が言われるように、通奏低音とも言えそうなものがある。なぜ日本仏教でそういう教えが広まったのか、あるいは展開したのか。

一つは、インドから発した仏教が二千年以上の歴史の中で展開してきた教理的な到達点として、この世のうちに救われるということがいろいろな立場から言われてきたのではないかと思う。その背景には『華嚴経』の、初めて菩提心を起こしたときにすなわち仏になるとする、「初発心時 便成正覚（しょほっしんじ べんじょうしょうがく）」という言葉がある。菩提心を起こすには信が成就しなければならない。信が決定して菩提心を起こせたら、もう仏と同じだということになるわけだが、これを「信満成仏（しんまんじょうぶつ）」という。この「信満成仏」の思想は、日本仏教に大きな影響を与えていると思う。

そういう仏教の考え方が注目され、歴史的な展開のなかで浮かび上がってきて、国民性のなかに浸透した。逆にいうと、国民の側で、俳句などのような、長いものを切り詰めて一つの短いもののなかに全世界を見るような、そういう国民性を持っているとも言える。一瞬のなかに永遠を見るなど、そういう国民性がある。この国民の資質のなかで「今ここで救われる」「今ここで成仏する」というような教えが求められ、またそれを求めて自覚していった。そういう背景から、日本ではそういうことが多く言われているのではないかと思う。

私は『空海の哲学』という本を講談社現代新書において出しているが、その前半は密教以外でも「即身成仏」に近い立場についていろいろと言われているということを解説している。

関心を持たれたらご参照いただきたい。

#### Q8 on-line : 空海の「即身成仏」の概念に輪廻や解脱は含まれるのか

仏教の出発点の概念では、成仏は六道輪廻からの解脱であると説かれていたように思うが、空海という「即身成仏」という概念のなかに輪廻や解脱という概念は含まれているのか。

(竹村)

私も最近、空海にずっと取り組んでいるが、空海のすべてを知っているわけではないので、空海のなかに輪廻や解脱がどのように説かれているのか、必ずしもよく分からない。ただ、一般に、小乗仏教は我執を断って生死輪廻から解放され、何の働きもない涅槃に入り、そして満足するのだが、大乘仏教では生死輪廻しながら修行して、最後に成仏して完成するとされている。大乘仏教も生死輪廻から解脱するが、しかし智慧を完成して、その智慧は利他の働きに展開する。唯識的な説明をすると、我々の一番根本にある阿頼耶識は始めのない過去から終わりのない未来まで相続していく。終わりが無いということは、仏になったらどうするのかということ、もっぱら他者を救済する活動をして止まない。そこに無住処涅槃(むじゅうしょねはん)がある。これは生死にも住さないが、涅槃にも住さない、どこにも住さない、そこに涅槃をみるということで、涅槃の意味も変わるわけである。

そういう考え方からすると、弘法大師の場合は、確かに「この世のうちに成仏する」ということも言っているので、では成仏したらどうなるのかという問題が出てくる。

『大日経』の最初に「菩提心を因と為し、悲を根本と為し、方便を究竟と為す」とある。「方便を究竟と為す」というのは、相手に応じた救済をしていくことである。したがって、やはり「死」はあって肉体は消えるが、その人自身は仏として存続し、我々に姿かたちは見えなくとも、どこかの世界で、あるいはひそかにこの娑婆世界に降り立って、衆生救済に働き続ける。このような考え方になるのではないかと思う。

#### Q9 on-line : 「他者」とは何か、どのように捉えられていたのか

空海がいうところの「他者」と自分自身を一体的に捉えることが悟りに繋がると自分なりに理解した。この「他者」は当時の考えとしては、どのように捉えるのか。自ら属していた集団の人間、人類なのか、あるいは動植物全て、果ては自然(森、川、海、山、田畑等々)すべてのことなのか。また、この空海の考えをもし人類(世界の全民族)みなが真に理解すれば戦争のような醜い争いはなくなるのか。

(竹村)

「他者」とは基本的には衆生になると思う。その場合、仏教には「十界」という考え方があり、「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩・仏」のすべての生き物ということになる。したがって、動物も含まれる。ただ、非情なるもの、自然、山や川などは「他者」なのかどうかという多少込み入った話がある。一個の人間について言えば、身心の個体が環境のなかに置かれて、それで一個の人間、一個の命なのである。あらゆる個体は

それぞれの環境において、その環境とセットで一つの個体ということになる。その環境世界は、唯識的というと阿頼耶識のなかにあり、それぞれの個のなかにある。そういう意味で、ここでいう「他者」に環境だけを独立させて「他者」と見るのはどうかと思うが、十界のあらゆる衆生の置かれている国土は、他者と切り離せないものである。その手続きを経て、他者の中に環境世界も含まれると言えないことはないが、要は、十界の有情を「他者」と見ていると捉えればよいのではないかと思う。

もし、本当に人類皆が互いに「他者」も自己と理解すれば、(争いは)なくなるのではないかと思うが、それはなかなか難しい話だろう。しかし、そういう理想、あるいは真実を伝えていくという活動は重要ではないかと思う。

#### Q10 on-line：諸仏・諸尊はどのように「私」に関わるのか

自他の関係性のなかで生きるという世界観だが、理神論的なものではなく、動的なものだと理解した。自らの精神世界の問題だと思うが、その中で他者、特に諸仏・諸尊と言われるものは、どのように「私」に関わってくるのか。啓示的な形で世界に介入してくるのか。

(竹村)

じつはもうすでに、互いに加入し、彼此摂持している。あるいは、今ここで三世十方のあらゆる諸仏・諸尊が外から私に働きかけているだろうと思う。空海の見方からすれば、我々には自覚されない(無明煩惱もあってそれが分からないのだが)、諸仏・諸尊の慈悲の心が常に「私」に注がれている、あるいは一人ひとりに注がれている。それが世界の実相だと、そういうことも空海は描いたのではないかと思う。

ただ、諸仏・諸尊という捉えどころがないので、それを一人の仏に集約して、その一人の仏を通して、その背後にある諸仏・諸尊の大悲を受け取ることもありえよう。浄土教の阿弥陀仏などはそういう構造になっているのではないかと思う。

#### Q11 on-line：空海の生命思想にシンギュラリティはどのように関係するのか

空海の生命思想とAIなどシンギュラリティの関係について先生のお考えを伺いたい。

(竹村)

空海はこういう現代の事態まで考えていなかったと思うので、もちろん直接的な言及はないが、空海からするとどう考えるべきかは考えてみなければならないと思う。私はAIの世界に疎く、スマートフォンもろくに操作できない人間だが、今の状況を見ると、シンギュラリティは来るのではないかと思う。それを放っておいてよいのか、科学はどこまでも独自に自律的に進歩するが、それに任せておいてよいのかどうかという問題がある。

一つには、活用の仕方において歯止めをかけるべきだという考え方があると思う。国際的にも、今盛んにそういうことで協定を結ぶようなことをしている。しかしAIは、ある意味で胴体のない頭脳だけを作っているような、胴体のない人間を作っているようなものではないかと思う。クローン人間を作るとは倫理的に止められているが、胴体のない人間は作

ってもよいのか、どこからはいけないのか、それを真剣に考えなければ、そのうちに人間が機械に支配されることになってしまうのではないか。空海は、もちろんそのことについては何も言っていないわけだが、私はそのように考えている。

#### Q12 竹村先生の仏教研究の到達点はどこなのか

先生の著書を拝見すると、最初は唯識論を議論されていて、それから良寛を通じて禅宗、浄土宗、あるいは『法華経』や『華嚴経』なども論じられていた。最近では密教の空海を取り上げられているが、『秘蔵宝鑰』の修行について『法華経』の常不軽菩薩行（じょうふきょうぼさつぎょう）を挙げられたりもしている。先生の仏教研究の現在の到達点はどのようなものか、伺いたい。

（竹村）

二重構造の曼荼羅において、自分が他者と一体であり、協働している自分であるということ、しかも他者のすべてが仏身で、四法身であるということからすると、自ずから常不軽菩薩の行のようなものが出てくるのではないかと考えられ、その辺りが今の到達点かもしれない。

思想的な到達点ということではそのようになるのかもしれないが、自分が今行っている研究から言えば、もう一度、空海が華嚴をどう見ていたのかを考えたいとも思っている。『秘蔵宝鑰』では『釋摩訶衍論（しゃくまかえんろん）』の言葉を引いて「華嚴などというのは、まだまだ無明の領域だ」と「下の下」というようなことを言っているが、相当に華嚴の考え方を取り入れなければ空海の密教の世界も成立していなかっただろうと思うので、実際のところ華嚴と密教がどういう関係にあるのか、その辺りを今後は研究していきたいと思っているところである。

#### Q13 他者と相互に浸透し合わない現代の高齢者は仏教的にどう捉えられるのか

最後の「一切の他者と相互に浸透し合い、協働し合っている中に、一個のいのちはある」という一文について、生物的には情報を遺伝子に溜めずに社会に溜めて生存競争を勝ったというのが人間の一つの見方だとすると、科学と似ていると感じる。

そのように考えると、最近の高齢者、私くらいの世代になると、4割ほどの人が1週間に1回ほどしか他者と会話をしないらしい。全く他者と相互に浸透し合っていないわけである。それは仏教的には解脱できない人生を選んでいるのではないか、4割は大きいと感じるが、それについてはどう思われるか。

（竹村）

それについては、すべての人がそれぞれ主体として、抑圧されず、差別されずに生きられるような社会を作っていくことを考えていかなければならないと思う。

発行日	2024年11月12日
講演著者	竹村 牧男
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像  
(国際高等研究所庭園)